

接頭辞 purh- を持つ OE 派生動詞

荒井 義明

一、一 言語研究の課題

Carl G. Hempel は、科学的探究の部門を、経験科学と非経験科学の二つの群に分けている。経験科学と非経験科学とを区別する規準は、命題の証明が経験的証拠に依存するか否かということにある。経験科学が求めることは、われわれの住んでいる世界における出来事を調査し、記述し、説明し、そして予測することであるとしている。¹⁾

A. D. de Groot は、経験科学の目的は、その学問領域によって扱われる現実の特殊部門に属する知識の獲得であるとする。科学的知識は、公的な知識であり、言語で表現されなければならない。科学は、現実についての叙述される明示的な、伝達可能な知識を目指している。²⁾ 科学は、その特定部門で出会う現象の経験を、〈観察〉——〈帰納〉——〈演繹〉——〈検証〉——〈評価〉の科学研究のサイクルを用いて処理する。³⁾

恩田彰博士は、創造の過程は、その活動分野を科学研究またはこれに準じた活動に限ると、問題解決過程として捉えることが出来るとし、その過程を、(1)問題発見、(2)課題形成、(3)課題解決の三つの段階に分けている。問題発見の段階は、現在および未来を見通して、解決し、処理しなければならぬ問題を発見することである。課題形成の段階は、問題を分析し、実際に解決処理し得る具体的な課題にすることである。課題解決の段階は、(1)情報の収集、(2)仮説の設定、(3)仮説の仕上げ、(4)検証、(5)評価に分けることが出来る。⁴⁾既に述べた de Groot の科学研究のサイクルは、この課題解決の段階の操作になる。

恩田博士に従えば、科学研究の問題解決過程は、先ず問題の発見から始まることになる。Karl R. Popper も、あらゆる認識は、問題から出発すると指摘している。⁵⁾ Thomas S. Kuhn は、「発見は、変則 (anomaly) に気付くこと、すなわち、自然が、通常科学 (normal science) を支配するパラダイムから生ずる予測をどういふわけか破ることから始まる。次に、その変則の領域を幾分広範囲に探究する。そしてパラダイム理論が変則が予測になる様に修正された時にのみ終了するのである。」と述べて、問題発見に始まる問題解決過程を概略している。⁶⁾

問題は、Kuhn が指摘している様に、変則として、すなわち、パラダイム理論と事実の不一致という形で生ずる。従って Elisabeth Ströker が述べている様に、「すでに或ることを知っているものだけが問うことができる。」⁷⁾のである。

Susanne K. Langer は、「問題解決の『手法』、すなわち、取り扱い方は、問として、それが先ず表現されることから始まる。問いの仕方は、正しにせよ誤りにせよ、その問いに対する答えが与えられる仕方を限定し、配列するのである。」⁸⁾と述べている。Ströker に従えば、科学においては、問いは、「事態がどうであるのか」と

「・・・という事態がなぜそうであるのか」の二つになる。そして「事態がどうであるのか」を確保することが記述である。また「・・・という事態がなぜそうであるのか」という問いに答えるものが説明である。⁹⁾

田辺元は、記述とは、分類によって同じ類に統一された対象の属性を命題に表わすこと、すなわち、その類が有する特徴を分析して、これをその類概念を主部とする命題の賓部として言い表わすことであると説明している。概念の内包を明確に規定することによって概念の意義を明らかにする方法を定義と呼ぶが、定義は、従って、記述の目的を成すものである。¹⁰⁾

今道友信教授は、記述は、対象のある任意の位相的現象の普遍的記号による正確な再現であると規定し、記述命題は、対象に内属する構造乃至性質の現象形式を分析的に記述することによって成立している命題であると説明している。¹¹⁾ 従って、記述は、ただ一個の物についての命題、すなわち、単称命題 (*singular proposition*) でもあり得る。

しかしながら、今道教授は、更に、「属性記述という断定によって言はば或る物差しで測量するように対象を一定の形相に還元したあと、この形相を介して思考は形相相互の系譜を求めて量的次元から質的次元に上昇し、問題は質化され、その結果として、定義をその現実態とする本質比較判断が成立する。」¹²⁾と述べている。このことは、記述は、単称命題から全称命題 (*universal proposition*) へ向かうのであるが、そこに量から質への転換があるということである。

記述は、田辺元に従えば、類に共通な属性で他の類と異なる特徴を成すものを分析して、定義を求めるものであった。田辺元は、更に、「記述する所の属性が或類の本質的属性ならば、其が普遍的なることは分類の本性上必然に要求せられることである。斯様に或類に属する対象が必然有する所の属性を明にするものとしては記述の

成果は即ち法則である。」と述べて、記述は、定義から法則へ至ることを明らかにしている。¹³⁾

記述は、従って、〈観察〉——〈帰納〉——〈演繹〉——〈検証〉——〈評価〉の科学的方法と、区分 (devision)、分類 (classification)、定義 (definition) の分析的操作によって、事物間の不変的關係である法則 (law) の発見を目指すものである。

田辺元は、法則に経験法則 (empirical law) と因果法 (casual law) の区別を認めている。¹⁴⁾ Ströker は、この区別を経験法則と理論法則という名称で区別している。経験法則は、量的法則であり、理論法則は、経験法則を特殊な場合として含む、より一般的な新しい経験法則の構成により得られる法則であるとしている。¹⁵⁾ 従って、経験法則は、分析的操作によって得られる法則であり、理論法則は、経験法則に、構成的操作を施して得られる、より高次の、より一般的法則ということが出来よう。Ströker は、理論法則の一定の総括が科学理論であるとする。¹⁶⁾ この Ströker の説明が正しいとするならば、記述は、個物の測定から出発して、究極的に最も普遍的な科学理論を目指すと言えよう。

Hempel は、科学的概念、法則、理論的原理相互の関係を網にたとえている。すなわち、科学的概念は、網の結び目にあたり、法則と理論的原理は、糸にあたるとしている。¹⁷⁾ このたとえに従えば、経験科学における記述は、その学問領域によって取り扱われる現実を、概念にまとめ、その概念相互を法則や理論の糸で結び合わせ、そしてその網でその学問領域の取り扱う現実を覆い尽くす作業になる。

田辺元は、説明 (explanation) とは、因果法によって特殊の事実の存する理由を理解せしめることであると定義している。¹⁸⁾ Ströker は、「科学者は、個々の事実を——一定の初期条件の下で——法則から、さらに法則より高い段階の法則から、そして最後にはもち合わせている理論から説明する¹⁹⁾。」と述べている。このことか

ら、説明は記述と逆の方向を持つ活動であることが明らかである。

John Hospers は、法則と理論との関係について、自然の法則は、われわれが発見するものであるが、理論は事物間の不変的関係である法則を説明するために、われわれが構成する (construct) ものであると述べている。²⁰⁾ また Hempel も、科学的仮説や理論は、観察された事実から導びかれるのではなく、それらを説明するために発明される (invent) のであると述べている。²¹⁾ 若しそうであるならば、法則と理論は次元の異なるものであるということになる。このことから、記述の目指すものは、究極的には、Stroker の述べている理論法則になり、説明の目指すものは、Hospers の言う理論の構成ということになる。

既に述べた様に、経験科学の目的は、その学問領域によって取り扱われる現実の特殊部門に属する知識の獲得であった。²²⁾ この知識の獲得は、Hospers が述べている様に、事象の中に規則正しい (regularities) を認めることから生じ、科学的概念と法則の網を構築する記述の方向と、その網のよって来たる根拠を明らかにする理論の構成と、事象をこの網の中に定位する説明の方向の二つの過程によって行われると言えよう。そして変則を理論が予測し、説明出来なくなると、問題が生じ、再び知識の獲得活動が始まるのである。

言語学 (linguistics) は、言語の科学 (science of language) すなわち、言語という学問領域を対象として、言語に関する知識を獲得することを目的とする経験科学である。従って、言語学の課題は、先に述べた記述と説明とによって、言語に関する認識をより分化し、深化し、発展させることにある。

科学的伝統文法 (scientific traditional grammar) の建設者である Henry Sweet は、理論的観点から見るならば、文法 (grammar) は、言語の科学 (science of language) であるとして、文法に記述文法 (descriptive grammar) と説明文法 (explanatory grammar) があるとした。²³⁾ 変形生成文法の建設者である、

Noam Chomsky は、文法記述の成功の段階を三つに分け、それぞれを観察の妥当性の段階 (level of observational adequacy)、記述の妥当性の段階 (level of descriptive adequacy)、説明の妥当性の段階 (level of explanatory adequacy) と呼んでいる。²⁴ これらは皆、成功の程度の差はあっても、記述と説明による言語の認識を目指しているものと言えよう。

一、二 語形式の課題

語形成 (word-formation) という術語は、新しい語の形成と、新しい語の形成という言語現象を研究対象とする言語学の分野の双方を指すのに用いられる。ドイツ語では、前者を造語 (Wortbildung)、後者を造語論 (Wortbildungslehre) と両者を区別して名付けている。

文法の領域は、通例音韻論、形態論、統語論の三つに分かれる。Eugene A. Nida は、形態論は形態素と語を形成する際の形態素の配列を研究するとしている。²⁵ Charles F. Hockett は、語の形成に、屈折 (inflection) と派生 (derivation) とを区別する。屈折は、屈折接辞 (inflectional affix) を取り扱う。²⁶ 語から屈折接辞を取り去ったものが語幹 (stem) である。そして派生は、語幹の構造を取り扱うとする。²⁷

Hans Marchand は、語形成は、一言語が新しい語彙単位 (lexical unit) すなわち、語を形成する型 (pattern) を研究する言語学の一分野であると定義している。²⁸ また Erhard Agricola (et al.) 編、*Die deutsche Sprache* では、造語論は、新語の形成 (Bildung neuer Wörter) に際し適用される法則 (Grundsatz) と方式 (Verfahren) を明らかにし、語の形成が従う法則性 (Gesetzmäßigkeit) を研究すると説明されている。²⁹

以上の説明による語形成の研究は、「語形成という事態がどうであるのか」という問いに対する答、すなわち、語形成が従う法則性の発見にあるのであるから、記述を志向していると言える。

ある要素が、文法的に逸脱性 (deviancy) を生ずることなく、ほかの同種の要素と同一の文、句、語などの中に生起する時、二つの要素は互に共起関係 (cooccurrence relation) を持つという。例えば、*The silence of the house frighten her.* は「正常な文であるが、*The boy may frighten sincerity.* は「正常な文ではない」。従って、*the silence of the house* と *frightened, frightened* と *her* は共起関係を持つが、*the boy* と *may frighten, may frighten* と *sincerity* は共起関係を持たない。語については、*unconscious* は正常な語であるが、*inconscious* は正常な語ではない。従って、*un* と *conscious* は共起関係を持つが、*in* と *conscious* は共起関係を持たない。

この様に、文、句、語における要素間の相関関係を考える場合、統語論においても、形態素配列論においても、すべての要素がすべての要素と生起するわけではない。この要素間の選択上の制限は、共起制限 (cooccurrence restriction) と呼ばれる。

この共起制限の問題は、従来の語形成においては、見過ごされて来たものである。従って、ある要素とある要素が結合して新語を形成する型を記述することが出来ても、換言すれば、「如何に」の問いに答えることが出来ても、説明、すなわち、「何故」ある要素とある要素が結合するののかの問いには答えることが出来ないのである。このことから、共起関係、共起制限を説明することが、新たに語形成の課題になる。

語形成における共起制限を説明する問題の解決のためには、統語論における共起関係の検討が役に立つであろう。

一、三 統語論における共起関係

変形生成文法では、統語上の共起制限を記述するために、選択制限 (selectional restriction) という機構を設けている。

Chomsky の提唱する文法においては、文法は、統語部門、意味部門、音形部門の三つの主要部門から成る。統語部門は、基底部門と変形部門の二つの下位部門から成る。基底部門は、枝分かれ規則 (branching rules) と、下位範疇化規則 (subcategorization rules) とから成る。

下位範疇化規則は、統語素性 (syntactic feature) を導入する規則である。下位範疇化規則には、固有素性 (inherent feature) を導入する文脈自由下位範疇化規則 (context-free subcategorization rule) と文脈素性 (contextual feature) を導入する文脈依存下位範疇化規則 (context-sensitive subcategorization rule) がある。文脈依存下位範疇化規則には、厳密下位範疇化規則 (strict subcategorization rule) と選択規則 (selectional rule) がある。厳密下位範疇化規則は、厳密下位範疇化素性 (strict subcategorization feature) を導入する規則である。また選択規則は、選択素性 (selectional feature) を導入する規則である。選択規則を Chomsky は次の様に定式化している。

- (1)
- $$[+V] \rightarrow CS / \left\{ \begin{array}{l} [+Abstract] Aux - \\ [-Abstract] Aux - \\ -Det [+Animate] \\ -Det -Animate \end{array} \right\}$$

そしてこの選択規則は、選択制限 (selectional restriction) または共起制限 (restrictions of cooccurrence) と呼ぶものを表わすものとしている。³⁰⁾

frighten に *þe* ' [+Abstract] [+Animate]], すなわち *frighten* は ' 主語に [+Abstract] という固有素性を持つ名詞を取り、目的語には [+Animate] という固有素性を持つ名詞を取ることを表わす選択素性が付与されている。この選択素性に基つて *The silence of the house frightened her*、という文は ' 適格文 (*well-formed sentence*) であると認められる。また *The boy may frighten sincerity*、という文は ' 上述の選択制限に反するので、逸脱文 (*deviant sentence*) とされる。

この様に、選択制限というものは、語の意味結合が行われるための、必要にして充分な条件を示すものである。選択素性は、この条件を、名詞の固有素性を用いて、その名詞が生起する環境を動詞に付与する形式で表示するものである。

既に述べた様に、下位範疇化規則は、統語素性を導入する規則であった。これは、名詞と動詞を下位区分する規則である。この下位範疇化規則は、文脈自由 (*context-free*) のものと文脈依存 (*context-sensitive*) のものの二つに分かれる。文脈自由下位範疇化規則は、固有素性を導入し、これにより名詞を下位区分する。文脈依存下位範疇化規則は、厳密下位範疇化規則と選択規則に分かれるが、これらによって動詞の下位区分が行われる。

Ferdinand de Saussure は ' 言語学を内的言語学 (*linguistique interne*) と外的言語学 (*linguistique externe*) とに分け、言語の固有の秩序である体系を取り扱うのが内的言語学であると³¹⁾した。そして言語記号は、言語内的な統合関係 (*rapport syntagmatique*) と連合関係 (*rapport associatif*) の中に位置付けられることによって価値 (*valeur*) を持つとしている。³²⁾このことから、文法学の一切の資料は、統合論か連合論の二つの軸の上に整理することが出来るとする。³³⁾

文脈依存下位範疇化規則によって導入される厳密下位範疇化素性と選択素性は、Sausure の述べる統合関係の分析により得られる素性であると言いうことが出来る。

元素素性 (feature) は、音素論に由来する術語である。音の流れを時間的継起に従って区切ると単音を得る。この単音を同時的性質に分析すると成分 (component) を得る。この成分の中で、ある音素を他の音素から区別するのに役立つ成分を弁別的特徴 (distinctive feature) と名付ける。音素的価値を有しない成分を余剩的特徴 (redundant feature) と言いつ。単音は、弁別的特徴と余剩的特徴とから成り、音素は弁別的特徴のみから成る。素性という概念は、音素論における単音を構成する同時的成分である特徴 (feature) に由来すると考えられる。

固有素性 (inherent feature) という術語も音韻論に由来すると考えられる。Jakobson と Halle は、弁別的特徴を、韻律特徴 (prosodic feature) と固有特徴 (inherent feature) の二つに分けて³⁴⁾いる。韻律的特徴は、音節を枠として現われる特徴である。これに対して固有特徴は、音素を単位として現われ、その成分となる。

音素を解体して同時的成分 (simultaneous component) を得る操作を成分分析 (componential analysis) と言いつ。この成分分析は、親族名称や色彩語の分析に応用された。生成文法における 「+ Common」,

「+ Animate」などの固有素性は、成分分析の手法によって体系的に得られるものである。成分分析は、Sausure の言いつ連合関係に基づく言語記号の弁別的特徴を抽出し、その特徴の組み合わせによっておのおのの言語記号を記述しようと試みる手法である。

以上の考察から明らかな様に、生成文法は、連合関係に基づく語の成分分析から得られる固有素性と、統合関

係に基づく文の分析から得られる厳密下位範疇化素性と選択素性によって、共起関係における規則性を記述すると言うことが出来る。

一、四 語の意味の記述と共起関係

服部四郎博士は、単語の意味的側面を「意義素」(sememe)と名付けている。³⁵⁾そして「意義素」は同時に現われる多くの「意義的特徴」に分析出来ると想定する。この意義特徴には、「語義的意義特徴」、「文法的意義特徴」、「文体的意義特徴」がある。³⁶⁾そして理論的には、各単語の意義素を意義特徴の束として記述出来るはずであるとしている。しかし、束といってもその内部構造がどうなっているかについては、色々な問題があると述べている。³⁷⁾

Chomsky は、語彙記載項目 (lexical entry) は、弁別的素性行列 (distinctive feature matrix) D と複合記号 (complex symbol) C とから成るとする。複合記号 C は、さまざまな種類の素性の集合である。

その素性には、統語素性、意味素性、どのような形態論的操作または変形操作が問題となっている項目を含む記号列に対して適用されるかということ指定する素性、一定の音形規則から項目を免除する素性などがある。³⁸⁾

Jeffrey S. Gruber は、互に言い換えられる文は、同じ語彙前の構造 (prelexical structure) を持つとい³⁹⁾前提に立って、語彙項目を分解して、その結果得られる抽象的な意味範疇を基礎的な単位として、統語的、意味的事象を記述することを主張している。これは、固有素性と文脈素性の基本的意味範疇 (elementary semantic category) への再編成と、それに基づく多範疇語彙項目付与 (polycategorical lexical attachment) の新しい方式である。この方式による語彙記載項目の形は、基底部門 (base component) で生成されるものと同じ種類の部分枝分かれ図 (subtree) であって、下部 (bottom) に形態素が付与される。⁴⁰⁾ Gruber は、この方法

で選択制限や共起関係にある語彙項目間の関係を包括的に記述することが出来るとする。⁴¹⁾

Gruber の説明に従えば、*horse* は、基底部門における次の規則によって、派生枝分かれ図が得られる。そしてこの枝分かれ図に *horse* が付与される。

- (2) N → (CONCRETE)
 CONCRETE → (OLD) (ANIMATE)
 ANIMATE → (MALE) (HORSE)

- (3) N
 — CONCRETE
 — ANIMATE
 — HORSE

また次の語彙前の構造には、*stallion* と *male horse* が付与可能である。

- (4) N
 — CONCRETE
 — ANIMATE
 MALE HORSE

Gruber のこの方式は、語の意味の構造の記述と同時に、語と語の共起関係を統一的に記述することが出来る

点で優れていると言えよう。

二、一 動詞接頭辞の機能

Juan M. de le Cruz に従えば、印欧祖語における句動詞 (phrasal verb) は、印欧諸語の大多数において、動詞前接統合体 (preverbal consolidation) に合体した。動詞前接統合体とは、不変化詞 (particle) が本来の自律性を失なって、動詞語幹 (verbal stem) に接頭辞として付けられ、それによって句の体系 (phrasal system) から、派生語の体系 (derivative system) になったものである。ゲルマン語においては再び新しい句の体系が生じるのであるが、この副詞と動詞との結合は、接頭辞の弱化と相関連している。⁴²⁾

Randolph Quirk と C. L. Wrenn は、語形成の過程を形態変換 (formative conversion) と限定 (modification) の二つに分けている。形態変換は、接尾辞添加やその他の形態上の変化を伴う品詞の転換による語形成である。限定は、複合と接頭辞添加による語形成である。そして接頭辞添加による動詞の限定には、接頭辞が持つ副詞的意味による限定と、アスペクト (aspect) の転換を引き起こす場合があるとしている。⁴³⁾

Hans Marchand は、複合・派生によって形成された語を、文法的結合連合 (grammatical syntagm) と呼び、規定詞 (determinant) と被規定詞 (determinatum) から成ると述べている。⁴⁴⁾ 動詞前接統合体にあつては、接頭辞が規定詞、動詞が被規定詞である。接頭辞の機能は、Quirk が述べている様に、接頭辞が本来持っている副詞的意味による動詞の限定と、動詞の持つアスペクトの転換ということになる。

Charles E. Townsend は、接頭辞添加の型を語彙的 (lexical) と副語彙的 (sublexical) の二つに分けている。語彙的添加の型において、接頭辞は、具象的な意味、あるいは、具象的な意味から派生した抽象的または質

の意味に関連した新しい語彙的要素を導入する。例えば *ugmu* (= to go) に *sa-* を添加した *sauumu* (= to go out) にあつては、接頭辞 *sa-* は、動詞 *ugmu* の動作を「具体的あるいは抽象的事物の領域外に出る」という意味に限定している。

副語彙的添加の型においては、接頭辞は、動作態様 (type of action, Aktionsart) を限定する。例えば、*kypumb* (= to smoke) に *sa-* を付けた *sakypumb* (= to finish smoking) にあつては、接頭辞 *sa-* は、動詞 *kypumb* の動作態様を限界態に限定している。⁴⁵⁾

接頭辞添加の型には、前記の様に、語彙的接頭辞添加 (lexical prefixation) と副語彙的接頭辞添加 (sub-lexical prefixation) の二つがある。*sa-* を持つロシア語の派生動詞の考察からも明らかな様に、接頭辞が語彙的機能を持つか副語彙的機能を持つかは、動詞語幹によって決定される。すなわち、接頭辞 *sa-* が、移動を表わす動詞 *ugmu* と結合する場合には、語彙的機能を持つ。これに対して、*sa-* が移動を表わさない動詞 *kypumb* と結合する場合には副語彙的機能を持つ。

語彙的接頭辞添加には、移動を表わす動詞と結合する場合の外に、場所内部での動作を表わす動詞と結合する場合がある。例えば、*cmorab* は、to stand, to be, to be situated を意味し、その表わす動作は場所内部で行われる。*cmorab* は、接頭辞 *om-* (= away from) の語彙的接頭辞添加によつて、*omcmorab* (= to be away) を形成する。従つて、語彙的接頭辞添加には、移動を表わす動詞と結合する場合と、場所内部での動作を表わす動詞と結合する場合の二つがあることになる。

副語彙的接頭辞添加は、既に述べた様に、*kypumb* の様な動詞の他に前に述べた二種類の動詞と結合する場合がある。例えば、前述の *cmorab* は、接頭辞 *y-* (= away) と結合して、*ycmorab* (= to resist)

を形成し、その動作態様は、継続態に限定される。

二、二 接頭辞と結合する動詞

Jeffrey S. Gruber は、動詞を移動動詞 (motional verb)、継続動詞 (durational verb)、不定動詞 (non-descript verb) の三種に区分している。⁴⁶⁾ 移動動詞は、主題が移動することを表わす動詞である。継続動詞は、ある一定期間動作が継続することを示す動詞を言う。不定動詞は、継続的であるのか、瞬間的であるのかに關しては不定であるものを言う。Gruber は、この三種の動詞の區別を MOTIONAL, DURATIONAL, NONDESCRIPT の範疇を用いて表示する。

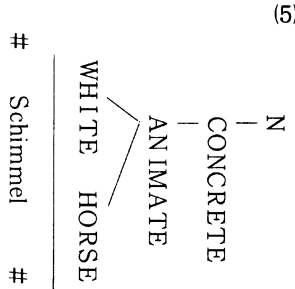
移動動詞は、更に(1)「位置の転移 (transition of position)」を表わすもの、(2)「所有の転移 (transition of possession)」を表わすもの、(3)「類の転移 (transition of the class)」を表わすもの、(4)「活動の転移 (transition of activity)」を表わすものの四種に下位区分される。⁴⁷⁾ Gruber は、この四種の転移を、⁴⁸⁾ Positional, Possessional, Identificational, Circumstance の媒介変数 (parameter) で表示している。

Gruber の前述の記述方式を用いると、*go* や *run* の様な動詞は、移動動詞で、位置の転移を表わす動詞であると共に、継続動詞でもある。また *lie* や *stay* の様な動詞は、継続動詞であるが、同時にある位置での動作を表わす動詞でもある。若し *lie* を DURATIONAL と Positional を用いて記述するとするならば、Positional は、定義によれば「位置の転移」を表示するものであるから、矛盾することになる。

Gruber が *go* の様な動詞を MOTIONAL や Positional を用いて記述する方法は、Charles Bally が所記の累加 (cumulé des significations) と名付けているものがその根底にある。所記の累加について、Bally

は、「一個の唯一不可分の能記が、記憶的連合によって、はっきり分析することができる幾つもの価値を含む時、所記の累加（略して単に累加）がある。」と説明している。⁴⁹⁾例えば、ドイツ語の *Schimmel* は、「白」と「馬」という同時的成分から成っている。すなわち *Schimmel* は「白」と「馬」とを編入している (incorporate) のである。編入 (incorporation) とは、Gruber に従えば、語彙項目の音韻形態によって語彙前の記号列の要素を置き換えることである。⁵⁰⁾

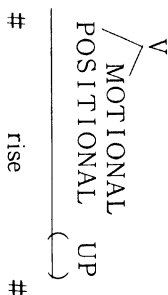
これを Gruber の方式で表示すれば、次の様になるであろう。



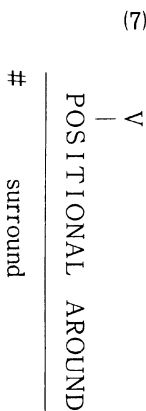
Chomsky は、既に述べた様に、名詞に関しては、固有素性を用いて下位区分をし、動詞に関しては、厳密下位範疇化素性と選択素性を用いて下位区分をした。Gruber は、名詞のみならず動詞をも、累加に基づいて、換言すれば、基本的意味範疇 (elementary semantic category) に基づいて、更にその意味構造を多範疇語彙項目付与の方式によって表示しようと試みるのである。

Gruber は、*rise* を MOTIONAL, POSITIONAL, UP という範疇を用いて、次のように記述してい

(6) る⁵¹⁾



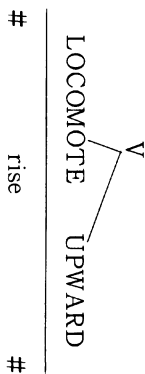
また *surround* を POSITIONAL, AROUND という範疇を用いて、次の様に記述している。⁵²⁾



rise と *surround* を POSITIONAL という同一の範疇を用いて記述することの矛盾は既に指摘した通りである。この矛盾を解決するためには、*rise* と *surround* を別個の動詞に分類して、その基底動詞範疇を新たに作り、POSITIONAL, UP, AROUND もそれぞれ新たな意味範疇に作り直さなければならない。

rise は、移動 (translocation) を表わす動詞である。この様な動詞を「運動動詞 (verb of motion)」と名付けることが出来る。移動のみを表示する基底運動動詞を LOCOMOTE を用いて表示することが出来る。*rise* は「上への運動 (upward locomotion)」という一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。今、*rise* のこの運動の方向性 (DIRECTION) に関する基本的意味範疇を UPWARD で表示するならば、*rise* の語彙記載項目は、次の様なものになるであらう。

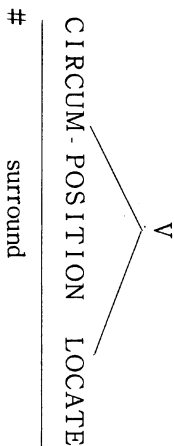
(8)



surround は *rise* と異なり、場所内部的 (intra-local) 動作を表わす動詞である。この様な動詞を、運動動詞に対して「静止動詞 (verb of rest)」と名付けることが出来る。静止動詞は、基底静止動詞 LOCATE と位置 (POSITION) を編入している動詞である。

surround は「(ある物) を取り巻く位置 (circum-position)」とらう一定の位置性を持つ動作を表わす動詞である。今 *surround* のこの位置性に関する範疇を CIRCUM-POSITION で表わすならば、*surround* の語彙記載項目は次の様なものになるであろう。

(9)



ロシア語 *kyrumb* は、運動動詞にも静止動詞にも属さない動詞である。*kyrumb* の表わす動作態様は継続態である。*kyrumb* が接頭辞 *ob-* と結合して形成された *obkyumb* は、限界態 (delimitative) を表わす。*obkyumb* の表わす動作態様に関する範疇を、DELIMITATIVE を用いて表示すれば、*obkyumb* の語彙記載項目は、次の様になるであろう。

DELIMITATIVE SMOKE

vykpu mb

以上の考察によって明らかな様に、運動動詞は、基本的には、基底運動動詞 LOCOMOTE と運動の方向性に関する範疇を編入していると考えられる。静止動詞は、基底静止動詞 LOCATE と位置性に関する範疇を編入していると考えられる。またその他の動詞は、基底動詞と動作態様に関する範疇を編入していると考えられる。

動詞は、上で述べた方向、位置、動作態様の他に、速度 (speed)、方法 (manner)、様式 (mode)、道具 (instrument) などに関する基本的意味範疇を編入する場合もある。これらの範疇は、名詞の固有素性と同様に、動詞の内在的特徴 (intrinsic characteristic) である。

Chomsky の記述方法は、固有素性と文脈素性に基礎を置く文の構造記述である。そして文脈素性には、統合関係の操作的分析によって得られた素性である。この様な操作的手順によって得られた素性を記述や説明の基本に用いることは循環論に陥る。この問題を解決するためには、内在的特徴による構造記述の方向を採らなければならない。

二、三 運動動詞の方向性に関する基本的意味範疇

ロシア語の移動動詞 (Verb der Fortbewegung) には、⁵³⁾ 定的動詞 (determiniertes Verb) と不定的動詞 (indeterminiertes Verb) とがある。定的動詞にあっては、移動は一つの方向に生じる。不定的動詞にあっては、移動は一つの方向に生じる。不定的動詞にあっては、移動は一つの方向に生じる。不定的動詞にあっては、移動は一つの方向に生じる。

ては、動詞は如何なる方向指示をも持たない。従つて定的動詞は、常に運動の方向性に関する意味範疇を編入している動詞であると考えることが出来る。このことから、定的動詞の分析によつて、その内在的特徴の一つである運動動詞の運動の方向性に関する基本的意味範疇が得られると考えられる。

rise については既に述べた。*fall* は「下への運動 (downward locomotion)」という一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。*fall* のこの運動の方向性に関する意味範疇を DOWNWARD で表示することが出来る。

vomit は「外への運動 (outward locomotion)」とつう一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。*vomit* が持つ運動の方向性に関する意味範疇を OUTWARD で表示することが出来る。

drink は「内への運動 (inward locomotion)」とつう一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。*drink* のこの運動の方向性に関する意味範疇を INWARD で表示することが出来る。

sail は「水平で「前方への運動 (forward locomotion)」とつう一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。*sail* のこの運動の方向性に関する意味範疇を FORWARD で表わすことが出来る。

back は「後方への運動 (backward locomotion)」とつう一定の方向性を持った運動を表わす動詞で *back* のこの運動の方向性に関する意味範疇を BACKWARD で表示することが出来る。

face は「(何かの) 前への運動 (frontward locomotion)」とつう一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。*face* のこの運動の方向性に関する意味範疇を FRONTWARD で表示することが出来る。

hide は「(何かの) 後への運動 (hindward locomotion)」とつう一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。*hide* のこの運動の方向性に関する意味範疇を HINDWARD で表示することが出来る。

skid は「横への運動 (sideward locomotion)」という一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。
skid のこの運動の方向性に関する意味範疇を *SIDEWARD* で表示することが出来る。

cross は「(何かを) 横切る運動 (crosswise locomotion)」という一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。
cross のこの運動の方向性に関する意味範疇を *CROSSWISE* で表示することが出来る。

direct は「(何か) の方への運動」という一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。
direct のこの運動の方向性に関する意味範疇を *TOWARD* で表示することが出来る。

carry は「ある場所から他の場所への運動 (transilient locomotion)」という一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。
carry のこの運動の方向性に関する意味範疇を *TRANILIENCE* で表示することが出来る。

stab は「(何かを) 貫通する運動 (penetration)」という一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。
stab のこの運動の方向性に関する意味範疇を *PENETRATION* で表示することが出来る。

arrive は「(何かに) 帰着する運動」という一定の方向性を持つ運動を表わす動詞である。
arrive のこの運動の方向性に関する意味範疇を *TERMINAL* で表示することが出来る。

over は「(何かを) 超越する運動 (super-locomotion)」という一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。
over のこの運動の方向性に関する意味範疇を *SUPER-LOCOMOTION* で表示することが出来る。

rotate は「(何かの回りを) 回る運動 (circumvolution)」という一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。
rotate のこの運動の方向性に関する意味範疇を *CIRCUMVOLUTION* で表示することが出来る。

pass (by) は「(何かの) 傍らを通る運動 (alongside locomotion)」という一定の方向性を持った運動を

表わす動詞である。*pass (by)* のこの運動の方向性に関する意味範疇を *ALONGSIDE* で表示することが出来る。

wander は、「方向の定らない運動 (indefinite locomotion)」と云う不定の方向性を持った運動を表わす動詞である。*wander* のこの運動の方向性に関する意味範疇を *INDEFINITE* で表示することが出来る。

cling は、「(何かに) 付着する運動 (addition)」と云う一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。

cling のこの運動の方向性に関する意味範疇を *ADDITION* で表示することが出来る。

leave は、「(何から) 離れる運動 (separation)」と云う一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。*leave* のこの運動の方向性に関する意味範疇を *SEPARATION* で表示することが出来る。

stretch は、「一次元的運動 (one dimensional locomotion)」と云う一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。*stretch* のこの運動の方向性に関する意味範疇を *EXTENSION* で表示することが出来る。

spread は、「二次元的運動 (two dimensional locomotion)」と云う一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。*spread* のこの運動の方向性に関する意味範疇を *EXPANSION* で表示することが出来る。

swell は、「三次元的運動 (three dimensional locomotion)」と云う一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。*swell* のこの運動の方向性に関する意味範疇を *DILATATION* で表示することが出来る。

come は、「話者への運動 (locomotion toward the speaker)」と云う一定の方向性を持った運動を表わす動詞である。*come* のこの運動の方向性に関する意味範疇を *TOWARD THE SPEAKER* で表示することが出来る。

go は、「話者から離れる運動 (locomotion away from the speaker)」と云う一定の方向性を持った運

動を表わす動詞である。so のこの運動の方向性に関する意味範疇を AWAY FROM THE SPEAKER で表示することが出来る。

運動動詞を VERB₁、静止動詞を VERB₂、その他の動詞を VERB₃ で表示し、基底運動動詞を LOCO-MOTE で表示し、方向性を DIRECTION で表示すると、運動動詞は、運動の方向性に関して、次の書き換え規則によって書き換えられる。

(II) VERB → (VERB₁)(VERB₂)(VERB₃)

VERB₁ → (LOCOMOTE)(DIRECTION)

DIRECTION → { UPWARD
DOWNWARD
INWARD }

二、四 静止動詞の位置性に関する基本的意味範疇

運動動詞は、移動を表わすことがその特質である。これに対して静止動詞は、場所内部的動作を表わす動詞である。静止動詞については、位置に関して、運動動詞の方向性に関する基本的意味範疇と同様に、様々な基本的意味範疇があると考えられる。surround の分析によって得られた CIRCUM-POSITION は、その一つである。

静止動詞の取り得る位置は、「上部の位置 (upside position)」、「下部の位置 (downside position)」、「外部の位置 (outside position)」、「内部の位置 (inside position)」、「前部の位置 (fore-side position)」、「後部の位置 (backside position)」、「付着 (adhesion)」、「分離 (segregation)」、「並置 (juxtaposition)」、「(ある物を) 取り巻く位置 (circum-position)」、「(ある物の) 上方の位置 (super-position)」、「位置

不定 (indefinite position) である。

これらの位置に関する基本的意味範疇を、それぞれ UPSIDE, DOWNSIDE, OUTSIDE, INSIDE, FORESIDE, BACKSIDE, ADHESION, SEGREGATION, JUXTAPOSITION, CIRCUM-POSITION, SUPER-POSITION, INDEFINITE を表示することが出来る。

前節で述べた様に、運動動詞を $VERB_1$ 、静止動詞を $VERB_2$ 、その他の動詞を $VERB_3$ で表示し、基底静止動詞を LOCATE で表示し、位置性を POSITION で表示するならば、静止動詞は、その位置性に関して、次の書き換え規則によって書き換えられる。

(12) $VERB \rightarrow (VERB_1)(VERB_2)(VERB_3)$

$VERB_2 \rightarrow (LOCATE)(POSITION)$

$POSITION \rightarrow \left\{ \begin{array}{c} \text{UPSIDE} \\ \vdots \\ \text{DOWNSIDE} \end{array} \right\}$

二、五 動作態様に関する基本的意味範疇

動詞の文法範疇には、時制、法、態、相、動作態様、人称、数がある。

英語およびフランス語では、ドイツ語の Aktionsart に相当する語がないために、相も動作態様も共に aspect と呼ばれている。Nida は 'aspect (the kind of action)', Townsend は 'Aktionsart (type of action)' としている。相と動作態様は、よく混同されるが、相が話し手の観方に依存する主観的な表現形式であるのに対して、動作態様は話し手の観方から独立した、動作・事象のさまざまな経過状況 (Verlaufsweise) に対する客観的なあるきまった表現形式である。⁵⁴⁾

事象の経過としては、まず開始 (Einsetzen) 進行 (Verlauf) および終り (Enden) がある。開始の段階を表わす動作態様は、起動態 (inchoative) である。これを図示すれば、 $\cdot \rightarrow$ となる。begin の持つ動作態様は起動態である。この動作態様に関する基本的意味範疇を INCHOATIVE で表示することが出来る。

進行の段階を表わす動作態様は、継続態 (durative) である。これを図示すれば、 \rightarrow となる。sleep の持つ動作態様は継続態である。この動作態様に関する基本的意味範疇を DURATIVE で表示することが出来る。終了の段階を表わす動作態様は、結果態 (resultative) である。これを図示すれば、 $\rightarrow \cdot$ となる。finish の持つ動作態様は、結果態である。この動作態様に関する基本的意味範疇を RESULTATIVE で表示することが出来る。


継続態は、動作の進行に妨げがなく継続する場合であるが、同じ動作が反復継続する場合は、反復態 (iterative) と言う。これを図示すれば、 $\cdot \cdot \cdot \rightarrow$ となる。beat の持つ動作態様は、反復態である。この動作態様に関する基本的意味範疇を ITERATIVE で表示することが出来る。


ある動作が間を置いて繰返される動作態様を repetitive と言う。これを図示すれば、 $\rightarrow = \rightarrow = \rightarrow = \rightarrow$ となる。intermit の持つ動作態様は repetitive である。この動作態様に関する基本的意味範疇を REPETITIVE で表示することが出来る。

一回の瞬間的動作を表わす動作態様は、一回態 (semelfactive) である。これを図示すれば、 \cdot となる。hit の持つ動作態様は、一回態である。この動作態様に関する基本的意味範疇を SEMELFACTIVE で表わすことが出来る。

限界のある動作を表わす動作態様を限界態 (delimitative) と言う。これを図示すれば、 (\rightarrow) となる。

glance の持つ動作態様は、限界態である。この動作態様に関する範疇を DELIMITATIVE で表示することが出来る。

動作の強度 (intensity) が次第に強まることを表わす動作態様を増加態 (augmentative) と言う。これを図示すれば、 となる。grow の持つ動作態様は、増加態である。この動作態様に関する基本的意味範疇を AUGMENTATIVE で表示することが出来る。

反対に動作の強度が次第に弱まることを表わす動作態様を減衰態 (attenuative) と言う。これを図示すれば、 となる。dimindle の持つ動作態様は、減衰態である。この動作態様に関する基本的意味範疇を ATTENUATIVE で表示することが出来る。

動作の強度が強い場合を強意態 (intensive) と言う。hammer の持つ動作態様は、強意態である。この動作態様に関する基本的意味範疇を INTENSIVE で表示することが出来る。反対に動作の強度が弱い場合を縮小態 (diminutive) と言う。この動作態様に関する基本的意味範疇を DIMINUTIVE で表示することが出来る。

作意を表わす動作態様を作為態 (factive) と言う。set の持つ動作態様は、作為態である。この動作態様に関する基本的意味範疇を FACTITIVE で表示することが出来る。

動詞の動作態様は、次の書き換え規則によって書き換えられる。

- (13)
- | | | | |
|------------|---|---|-------------|
| AKTIONSART | → | { | INCHOATIVE |
| | | | DURATIVE |
| | | | RESULTATIVE |
| | | | ∴ |

二、六、一 位置の移動を表わす運動動詞と結合する purh-

purh- が、位置の移動を表わす *faran* (= to go) や *gān* (= to go) の様な運動動詞に添加されると、その移動を「ある地点から他の地点へ」という「地点間の移動」に限定する。

purh- が添加されて「地点間の移動」を表わす様になった派生動詞は、*Fixas purhgāp papas ses.* における様に経路を表わす名詞の対格を伴なう。この対格は、格文法で経路格と呼ばれるものを表示している。

purhgān の語彙記載項目は、次の様なものとなろう。

(14)

TRANSILIENCE LOCOMOTE

purhgān

武器などが主語になると、*His sword secl purhgān þīne sawele.* における様に、*purh-* と位置の移動を表わす動詞の結合が、次節で述べる貫通する運動を表わす。このことは、動詞の意味を限定するものは、接頭辞ばかりでなく、主語や目的語の性格によっても限定が行われることを示唆するものである。

二、六、二 貫通を表わす運動動詞と結合する purh-

purh- が、*delfan* (= to dig) の様な貫通を表わす運動動詞に添加されると、その運動を「ある物を貫通する」運動に限定する。

この「貫通する」運動を表わす派生動詞の対格目的語は、*Hj purhdulfon mīne handa and mīne fet.*

における様に、ある体積を持った物体である。この対格は、格文法で場所格と呼ばれるものを表示している。

purhdelfan の語彙記載項目は、次の様なものとなる。

(15)

V
└───┬───
PENETRATION LOCOMOTE

purhdelfan

purh- は、物理的運動を表わす動詞のみでなく、*séon* (= to see) や *wlitan* (= to look) の様な動詞と結合して、その動詞の運動を貫通する運動に限定する。*God ge séop and purh séop ealle his geceasta.* や *We ne magun hygeponces ferdægum purhwilitan.* における *purh séon* や *purhwilitan* がその例である。

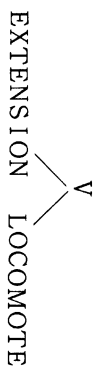
二、六、三 面的運動を表わす運動動詞と結合する *purh-*

gān の表わす位置の移動は、一次元的運動である。これに対して、*smirian* (= to smear) の様な動詞は二次元的運動を表わす。*purh* が *smirian* の様な動詞と結合すると、その二次元的運動がある場所の限界に達する迄行われることを意味する。

Hē mid ele and mid crīsmān mē purhsmyrede. における対格 *mē* は、格文法で場所格と呼ぶものである。この文において、*purhsmirian* は、*smirian* とらう二次元的運動が *mē* という場所の全てに亘って行われることを表示している。

purhsmyrian の語彙記載項目は、次の様なものとなる。

(16)



purhsmyrian

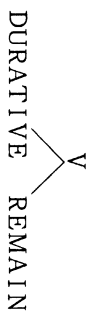
二、六、四 副語彙的接頭辞としての *purh-*

purh- が副語彙的に添加する動詞は、運動動詞に属さない動詞である。

purh- が *wunian* の様な静止動詞と結合すると、動詞の動作態様を持続態に限定する。 *wunian* は *to inhabit, to remain, to be used* 等の意味を持つが、*purh-* と結合して *purhwunian* になると *His rice purhwunap on écnesse* における様に、*to remain* を意味し、その動作態様は持続態のみに限定されるのである。

purhwunian の語彙記載項目は、次の様なものである。

(17)



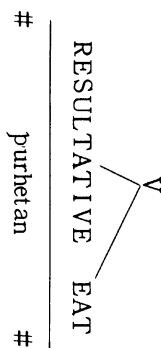
purhwunian

purh- が *etan* (= to eat) の様な不定動詞と結合すると、*Se wynn þā eagan þurheteþ* における様

に、動詞の動作態様を結果態に限定する。

purheian の語彙記載項目は、次の様なものであろう。

(18)



三、一 結 語

本稿の問題は、二つあった。その第一は、接頭辞 *purh-* を持つOE派生動詞が形成される型、すなわち、これらの派生動詞の形成が従う法則性の発見である。第二は、これらの派生動詞における二つの要素、すなわち、接頭辞 *purh-* と動詞の共起関係の説明であった。

この二つの問題の解決のために、Gruber の提唱する多範疇語彙項目付与の方式が有効であるという見通しを立て、運動動詞の方向性、静止動詞の位置性、および動作態様に関する基本的意味範疇を分析した。そして、これらの意味範疇と、基底運動動詞、基底静止動詞を用いることによって、共起関係の記述と説明が可能になった。

語形成の型としては、Townsend が述べている様に、基本的には、語彙的と副語彙的の二つになる。語彙的な範疇に属するものは、*purh-* が運動動詞と結合する場合である。この型は更に、「地点間の移動」、「貫通」、「二次元的運動」の三つに分かれる。副語彙的な範疇に属するものは、*purh-* が静止動詞およびその他の動詞

と結合する場合である。この場合は、二つに分かれる。静止動詞と結合すると、派生動詞の表わす動作態様は、継続態になる。その他の動詞と結合する場合には、派生動詞の表わす動作態様は、結果態になる。

〔註〕

- (1) Carl G. Hempel, *Philosophy of Natural Science*, p. 7.
- (2) A. D. de Groot, *Methodology*, 岩脇三朗・梅本堯夫監訳、「行動科学の方法」p. 22.
- (3) Ibid., pp. 33—34.
- (4) 恩田彰「創造心理学」pp. 23—24.
- (5) 高島弘文「カール＝ポパーの哲学」p. 46.
- (6) Thomas S. Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, pp. 52—53.
- (7) Elisabeth Ströker, *Einführung in die Wissenschaftstheorie*, 常俊宗三郎・西谷敬訳「科学哲学の根本問題」p. 27.
- (8) Susanne K. Langer, *Philosophy in a New Key*, p. 1.
- (9) Elisabeth Ströker, op. cit., p. 29.
- (10) 田辺元「科学概論」pp. 216—218.
- (11) 今道友信「存在と知識」岩波講座哲学Ⅷ p. 237.
- (12) Ibid., p. 270.
- (13) 田辺元 op. cit., p. 223.
- (14) Ibid., p. 224.
- (15) Elisabeth Ströker, op. cit., p. 74.
- (16) Ibid., p. 76.
- (17) Carl G. Hempel, op. cit., p. 94.
- (18) 田辺元 op. cit., pp. 224—225.
- (19) Elisabeth Ströker, op. cit., p. 32.

- ② John Hospers, *An Introduction to Philosophical Analysis*, 斎藤哲郎監修「分析哲学入門」, p. 159.
- ⑬ Carl G. Hempel, op. cit., p. 15.
- ⑭ John Hospers, op. cit., p. 146.
- ⑮ Henry Sweet, *A New English Grammar*, Part I, pp. 1—2.
- ⑯ Noam Chomsky, "Current Issues In Linguistic Theory", J. A. Fodor and J. J. Katz (eds.) *The Structure of Language* p. 63.
- ⑰ Eugene A. Nida, *Morphology*, p. 78.
- ⑱ Charles F. Hockett, *A Course in Modern Linguistics*, p. 209.
- ⑲ Ibid., p. 240.
- ⑳ Hans Marchand, *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation*, p. 2.
- ㉑ Erhard Agricola, et al. (eds.) *Die deutsche Sprache*, p. 423.
- ㉒ Noam Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*, p. 95.
- ㉓ Ferdinand de Saussure, *Course de linguistique générale*, pp. 40—43.
- ㉔ Ibid., p. 149.
- ㉕ Ibid., p. 188.
- ㉖ Roman Jakobson and Morris Halle, *Fundamentals of Language*, p. 22.
- ㉗ 陸谷国敏「概説」収載『言語学』XI, p. 300.
- ㉘ Ibid., pp. 323—324.
- ㉙ Ibid., p. 330.
- ㉚ Noam Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*, p. 164.
- ㉛ Jeffrey S. Gruber, *Studies in Lexical Relations*, p. 7.
- ㉜ Jeffrey S. Gruber, *Functions of the Lexicon in Formal Descriptive Grammars*, p. 63.
- ㉝ Ibid., p. 19.
- ㉞ Juan M. de la Cruz, "The Origins of the Germanic Phrasal Verb", *IF. Band 77*, pp. 73—74.

- (43) Randolph Quirk and C. L. Wrenn, *An Old English Grammar*, pp. 108—119.
 - (44) Hans Marchand, op. cit., p. 11.
 - (45) Charles E. Townsend, *Russian Word-Formation*, pp. 118—119.
 - (46) Jeffrey S. Gruber, *Studies in Lexical Relations*, p. 40.
 - (47) Ibid., pp. 47—48.
 - (48) Ibid., p. 126.
 - (49) Charles Bally, *Linguistique générale et linguistique française*, p. 149.
 - (50) Jeffrey S. Gruber, *Studies in Lexical Relations*, p. 13.
 - (51) Jeffrey S. Gruber, *Lexical Structures in Syntax and Semantics*, p. 29.
 - (52) Ibid., p. 48.
 - (53) A. V. Isačenko, *Die russische Sprache der Gegenwart*, Teil I, p. 421.
 - (54) Hugo Moser und Ingeborg Schröbler, *Mittelhochdeutsche Grammatik*, p. 352.
- 参考文献
- Agricola, Erhard, et al. (eds.) *Die deutsche Sprache*, Leipzig: VEB Bibliographisches Institute, 1969.
- Bally, Charles, *Linguistique générale et linguistique française*. Bern: A. Franke AG Verlag, 1965.
- Chomsky, Noam, "Current Issues In Linguistic Theory" J. A. Fodor, J. J. Katz (eds), *The Structure of Language*, pp. 50—118. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall, Inc. 1964.
- Chomsky, Noam, *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge: The M. I. T. Press, 1965.
- Cruz, Juan M. de la, "The Origins of the Germanic Phrasal Verb" I F. Band 77, pp. 73—96.
- De Groot, A. D., *Methodology: Foundations of Inference and Research in the Behavioral Sciences*. 岩脇三朗「梅本堯夫監訳」「行動科学の方法」京都・ミネルバ書局 1976.
- Gruber, Jeffrey S., *Studies in Lexical Relations*. Unpublished Ph. D. dissertation, M. I. T., 1965.

- Gruber, Jeffrey S., *Functions of the Lexicon in Formal Descriptive Grammars*. California: System Development Corporation, 1967.
- Gruber, Jeffrey S., *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. New York: North-Holland Publishing Company, 1976.
- 服部四郎「意味」岩波講座哲学Ⅹ「言語」pp. 283—338. 東京・岩波書店 1968.
- Hempel, Carl G., *Philosophy of Natural Science*. Englewood Cliff, N. J.: Prentice-Hall, Inc. 1966.
- Hockett, Charles F., *A Course in Modern Linguistics*. New York: The Macmillan Company, 1958.
- 金道友信「存在と知識」岩波講座哲学Ⅳ「東京・岩波書店」1968. pp. 237—278.
- Isăcenko, A. V., *Die russische Sprache der Gegenwart*. Teil I, Halle: VEB Max Niemeyer Verlag, 1968.
- Jakobson, Roman, and Morris Halle, *Fundamentals of Language*. The Hague: Mouton & Co., 1956.
- Kuhn, Thomas S., *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago: The University of Chicago Press, 1962.
- Langer, Susanne K., *Philosophy in a New Key*. New York: A Mentor Book, 1954.
- Marchand, Hans, *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation*. München: C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1969.
- Moser, Hugo, and Ingeborg Schöbier, *Mittelhochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 1969.
- Nida, Eugene A., *Morphology*. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1959.
- 岡田謙「創造心理学」東京・恒星社厚生閣 1974.
- Quirk, Randolph, and C. L. Wrenn, *An Old English Grammar*. New York: Holt, Rinehart & Win-

- ston, Inc., 1957.
- Saussure, Ferdinand de, *Cours de linguistique générale*. Paris : Payot, 1967.
- Ströker, Elisabeth, *Einführung in die Wissenschaftstheorie*. 常俊宗三郎・西谷敬訳『科学哲学の根本問題』東京・晃洋書房、1977.
- Sweet, Henry, *A New English Grammar*. London : Oxford University Press, 1955.
- 高島弘文「カール・ポパーの哲学」東京・東京大学出版会、1975.
- 田辺元「科学概論」東京・岩波書店、1921.
- Townsend, Charles E., *Russian Word-Formation*. New York : McGraw-Hill Book Company, 1968.
- Wright, Joseph, *Old English Grammar*. London : Oxford University Press, 1943.